2010年3月31日発行

No.24

ニュースレター News Letter

CHRISTIANITY AND CULTURE RESEARCH INSTITUTE KANTO GAKUIN UNIVERSITY

年度末所感 ―落ち着きと先慮の勧め

キリスト教と文化研究所所長　村椿真理

現代人の宿命の一つに忙しさがあり、「時間を持たない」という現実がある。本来の職務遂行の中に絶えず新たな課題や義務が立ち現れ、それに応じきれなくなるのである。これに対し、のんびりかまえていて適切な対応がとれないという過ちを犯す可能性があるが、他に、「焦ってしまう」という対応の過ちもある。

慌てて仕事に着手するあまり、内心息切れしてしまい、できる仕事まで駄目にしてしまうのである。諸要請に対して、一体人間は、如何にして立ちおくれることなく対処することができるだろうか。重要なことは「落ち着く」ことである。限られた時間の中で、要求された諸課題をどのように処理することができるか、何から優先し、何をいつまでに仕上げるか、時間を正しく区分し、時間の用い方、仕事のテンポを決め、自ら余裕を持つことである。この能力のことを古い言葉で「放下」（Gelassenheit）〔=冷静・沈着〕と呼ぶ。冷静、沈着さをもって焦りから解放されることが重要である。そして今なすべきことを、時を逸することなくその時に行なうのである。

研究所は年度末にあたり、一年で最も多忙な時期を迎えた。共同研究グループ、研究プロジェクト各員が、落ち着きと先虜をもって活動を継続し、新しい希望を抱いて新年度に備えている。目先のことだけでなく、是非とも中長期の展望をもって取り組んで頂きたい。

研究所は迎える年度、研究体制の抜本的再検討を目指している。変えるべき事柄と、変えてはならない事柄をしっかり識別し、よりよい活動体制を整えるものでありたい。研究所の業をいつも応援して下さるみなさま方の期待に応え得るよう、一層努める所存である

Column「セツルメントからサービスラーニングへ」　所員　森島牧人

学院教育の特色は「奉仕教育」にあります。本研究所の中で、これに関する理論と実践研究を目指すプロジェクトが「国際理解とボランティア」です。

学院史には、昭和の初期、日本のキリスト教界にも強い影響を与えた社会的福音（Social　Gospel）と呼応する形でセツルメントを目指した記録があります。これは「人になれ　奉仕せよ」との校訓を、その教育課程の中に展開しようとした学院教育の実験教室づくりでした。というのも、このセツルメントこそは、横浜バプテスト神学校を創設し、”He lived to serve”とその墓石に刻まれたA．A．ベンネットと、学院の校訓「人になれ　奉仕せよ」を語った坂田祐、この両先生の教育における理念を具現化したものと捉えられていたからです。つまりこのセツルメントは、学院史における「異なるもの」理解への神学的・実践的試みへのプロローグであったのです。

現在、当研究プロジェクトでは、学院の建学の精神であるキリスト教に基づく奉仕の精神とその実践方法を様々な角度から学びつつ、それらを学院の今日的奉仕教育の在り方として展開する「関東学院サービスラーニング」を、バプテストの宣教地であったミャンマー（ビルマ）とタイとの国境地帯に住む山岳少数民族の村々で実施し、奉仕教育への研究活動を進めています。

「日本で知り合ったクリスチャンから与えられた素晴らしい贈り物の一つは、
神学上の第一原則としての「神の愛」を強調することです。」Davidson.Dwight Preston

宣教師から見た日本のキリスト教

アメリカンバプテスト海外伝道協会派遣宣教師
ドワイト・P・デビットソン

8年に渡る関東学院でのミッションを終え、アメリカに戻られるドワイト宣教師。帰国前に派遣宣教師の目から見た日本のキリスト教について伺いました。

2001年、妻と私はアメリカンバプテストの宣教師として横浜に遣わされ、以来関東学院の一部とされてきたことを光栄に思います。私たちを受け入れてくださった多くの方々の助けと親切によって、私たちは関東学院の教育機関だけでなく地域教会や日本の様々な教会組織の中で働くことが出来ました。

私が日本で出会ったクリスチャンについて好きになった点の一つは、日本と世界のキリスト教の最も良いものを残し、また学ぼうとする彼らの注意深さです。このことは関東学院においても確かです。この研究所ではバプテスト研究グループの働きを通してバプテスト派の展望を生かし、また坂田祐先生の遺産を丁寧に受け継いできました。

日本で知り合ったクリスチャンから与えられた素晴らしい贈り物のもう一つは、神学上の第一原則としての「神の愛」を強調することです。もちろんこれは新しい考えでもありませんし、日本に限った特徴でもありませんが、日本の教会は何が最も大切かということを中心におく手段として神の愛を強調していると私は考えるようになったのです。クリスチャン人口が少数の国において、歴史の中で2000年もの間クリスチャンを夢中にし、分割してきた学問的、教理的な論争に強調を置くことはたしかにほとんど意味のないことです。神様の愛の中で、また神様の愛を通して共に集まることの方がずっと意味があり、私が出会った日本人クリスチャンの大多数がこのことを分かっています。

一方で、日本の多くの教会組織やミッションスクールには共通の「さらに取り組むべき課題(growing edge)」があると私は感じます。アメリカにおけると同様に、教会やミッションスクールにとっての永遠に続く挑戦は、「最も良い習慣」を側面的に育てる方法を見出す、あるいは発明することです。日本には多くのキリスト教の教育機関、教会、教会組織がありますが、お互いに情報を交換したり共に最も良い習慣を調べるための類似するグループ間の手段が比較的少ないように思います。教会組織もミッションスクールも、独立して機能する傾向があります。すなわち側面的(組織の外に目を向けて成長や改善のための新しいアイディアを発見する)よりも(自己の組織内で)水平的に問題を解決しようとするのです。

この点については、私はこの研究所が日本のキリスト教界において重要な役割を果たすと信じています。このような研究所において、組織内外の人々が共に問題を確認し、個々の観点を分かち合い、共通の解決を生み出すのです。これは日本の教会にとって良い前兆です。私の祈りは、このような研究所が、関東学院やこの麗しい国におけるあらゆる教会に連なる組織と共に、長く豊かな歩みをし、この世をシャロームへと招いておられる愛の神の働きに参与し続けることです。皆さんに恵みと平和がありますように。

ドワイト・P・デビットソン
Davidson.Dwight Preston
マイアミ大学院英文学修士
プリンストン神学校神学修士
2001年米国バプテスト海外伝道協会宣教師として来日
2007年関東学院宗教主事、文学部チャプレン
2010年6月帰国予定

「坂田祐日記」所感

坂田祐研究プロジェクト客員研究員　　坂田　創

学校に関する記事は必ず「礼拝」から書き始めている。坂田は当然のことながら毎日生徒教員と共に礼拝に出席して一日を始める。

「Chapel　約350、K君（注：教員）司会し、力ある奨励をなせり、市電にて捜真ゆきChapelに出席」

これは1933年6月15日（木）の記事である。1919年私立中学関東学院を開校して以来、礼拝出席は強制せず自由にしていたので、毎日の出席数には気をつけていたようで必ず人数を記している。当時の生徒数は900名位であった。礼拝に対する感想も時々記されている。この頃は捜真女学校の校長も兼務していたので努めて出席していた。

坂田は『恩寵の生涯』の中で「最初宗教の行事は強制しない方が良いと、有力なミッションスクールの院長である先輩の意見に余も賛成して、礼拝の出席を自由にしていたが後に至ってよく研究検討の結果、中学時代はむしろ強制した方が良いとの結論に到達したので、必ず出席させることにした」と述べている。どの時点から強制に切り替えたのか、その経緯も含めていずれ日記に出てくるだろうと期待している。期待も解読の楽しみの一つである。

既に2年前には満州事変が起きていて、世の中は次第に軍国主義に傾いて行き、やがてキリスト教学校に対する圧迫が増して来る。その中で礼拝を守り続けることは、キリスト教を以って建学の精神とする学院の生命線であった。戦時中の干渉、圧迫、中傷にも屈せず、坂田は体を張って礼拝を守り通した。

坂田 祐

関東学院大学　キリスト教と文化研究所
〒236-8501
横浜市金沢区六浦東１－５０－１
電話：０４５－７８６－７８７３（研究所直通 月～金曜 10：00～16：00まで）
FAX：０４５－７８６－７８０６（研究所直通 24時間受付）

発行者：村椿真理
Director: Makoto Muratsubaki